無線技術の日本史

—日本海海戦に貢献した木村駿吉の生涯—

石原藤夫

まえがき

日露戦争に関する名著『アメリカにおける秋山眞之』や『ロシアにおける広瀬武夫』をお書きになった島田謹二氏は、「秋山眞之の海戦時の文章に感動した事がこれらの本を書く原動力になった」――という意味の言葉をのこしておられる。

他の多くの日露戦争本の作者も、似た経験をされているらしい。

じつは私も同様であった。

もう数十年も前になるだろうか、元上智大学教授で「アンテナ技研」の創業者である知人の佐藤源貞博士が、「日本無線(株)」の社報を送って下さった。

そこには、佐藤博士がお書きになったエッセイがあり、日本海海戦に貢献した無電機の開発者木村駿吉の業績と、秋山眞之から駿吉に当てた礼状の一部が記されていた。

木村駿吉は「日本無線(株)」の創業者の一人であり、そのため佐藤源貞氏が依頼されて執筆したのである。

私は、そこにあった秋山眞之の礼状（の一部）に感動した。

何という名文なのか！

そしてその名文に魅せられて、礼状の宛先である木村駿吉の事が無性に知りたくなった。

そこで資料集めに入り、何人かの知人の協力を得て、ほぼ二十年をかけて大体の知識を得たので、執筆したのが本書である。

日本の無線技術の歴史において、最初に実用になった無線機は、木村駿吉が開発して日露戦争に用いられた「三六式無線電信機」である。

従って木村駿吉の伝記を書くことはまた、揺籃時代の日本の無線技術の歴史を書く事でもある。

そこで題名を『無線技術の日本史』とし、副題を――日本海海戦に貢献した木村駿吉の生涯――とした。

昭和二十年以後の日本は、日露戦争を戦った明治の日本人の辛苦を忘れがちであるが、歴史を調べれば調べるほど、「よくぞやってくれた」という明治人への感謝の気持ちが高まる。

本書は『国際通信の日本史』『発明特許の日本史』に続く日本技術史三部作の最後となるが、この三冊のどれにも、明治の日本人の苦闘の歴史が記されている。

ぜひ若い人達に、日本技術史の偉人たちの熱意と業績を知ってほしいと、念願している。

平成二十九年十二月

石原藤夫